

北の鉄道風景

Train number; 15D

2023.4.10 17:00

1/250, f/11, ISO 200, f=24mm, Daylight/Sunny

4912×7360 Raw

第128回

名作・駄作

その多彩な映像の海を泳ぐと、ゴミや流木、さらには毒物、劇薬もあるが、確かにいい漂流物もあって、いいねやハートを押したりするのが現代人の日常になった。

SNSの時代、誰もが世界に向けネット発信できるようになり、ネット環境の大容量化は画像によるメッセージ発信を当たり前にした。撮影機材も発達し、スマートフォンでも半世紀前の大判カメラよりもよく撮れるし、動画にもなる。視覚の動物、人類にとって

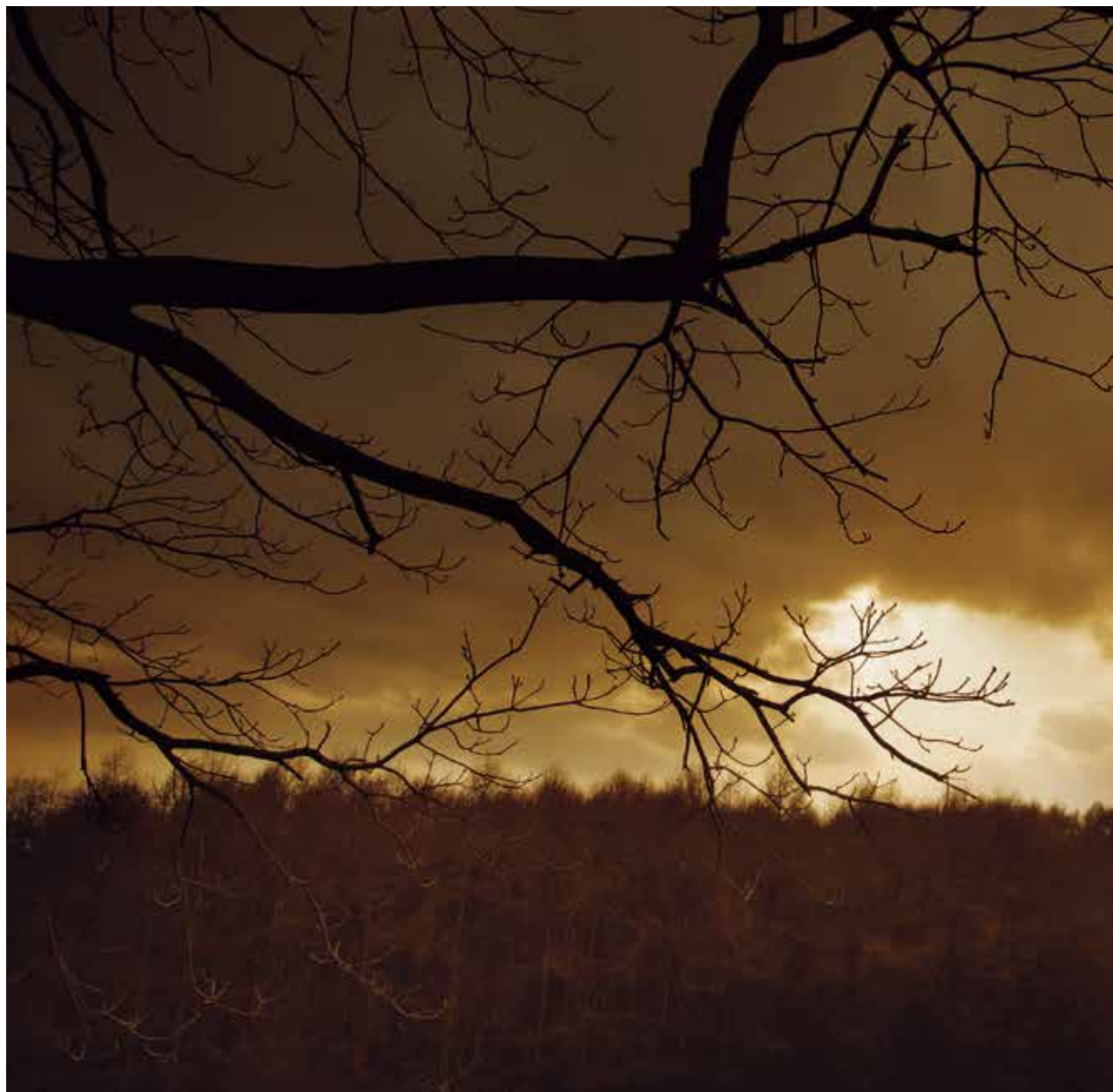
の革命が起きたと言ってもいいだろう。

ではそれに合わせて、世の中は名画で溢れるようになったのか。我々の脳は、到達困難な数々の獲物を常々探しているようで、なかなか出会えぬものしか「名作」とはしないから、そんなことはなさそうだ。

そもそも、名作、駄作の判断基準はどこにあるのか。もはや画像の高品質は当たり前だ。あとは奇抜な造形、意



晩秋の山野を行く混合列車。若い私はSLの姿に夢中だったが、今の私にはその空気感にうまさを感じる。根室本線 1973



写真と文＝眞船直樹

表を突くアプローチ、そこに存在する実態自体の迫力などになってくる。だが、結局のところ作品がどれだけ見る者の心を揺さぶるかが名作、駄作の決め手になるというのが昔から変わらぬ結論だ。ならば、見る側はその普遍的基準を、こんな時代にこそ権威や流行りや煽りや推しに翻弄されず、遺憾なく適用すればいい。足並みをそろえ、束縛されるためのネットではない。

私は絵が下手だから……と女房は言う。たしかに、鳥獣戯画を手本に描いた女房のウサギは、戯画の中で暴れまわる生き生きした表情も元気さもない痩せこけたものであった。では女房の描いたウサギが、戯画そっくりであれば上手いのか。いや、違う。私にはこの貧相なウサギこそ愛おしくかけがいのないものなのだ。モナリザよりもブレボケの変色した初恋の人のサービスサイズのプリントの方が大切、サグラダ・ファミリアよりも砂の城が波に流されて泣いている孫のスナップの方が泣けてくる。世にいう名作と自分にとっての名作は違って当然。自己の感性を耕して手に入れたたぐさんの名画に囲まれている方がいいに決まっている。